

Title	山陰地方史學研究旅行記
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.121(464)- 127(470)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山陰地方史學研究旅行記

古代文化の發祥地として、將亦た治亂興亡の實舞臺として、常に吾人の憧憬の的と成りつゝあつた出雲地方、一度はその地を訪れて、遠き近き過去の時代を目のあたり偲びたいとは兼れてよりの大なる希望であつた、その希望は今茲に大正十三年七月下旬の研究旅行として實現されたのである。

七月二十二日の夕灼熱に喘ぐ帝都を後に吾人は多大の期待を以て樂しき旅行の途に上つた。

七月二十三日 快晴。この日の豫定は、今回西下の機會を利用して、京都帝國大學訪問に充てられてあつた。一行は京都驛より直に同大學へと向つた。先づ文學部考古學研究室を訪問、濱田耕作博士及び梅原未治氏に面會、梅原氏の案内で考古學陳列室に於て、日本、支那、朝鮮、滿蒙地方の殊に羅振玉氏寄贈の龜版、封泥以下の珍品、埃及、南米等の發掘にかゝる人骨、石器、土器、銅器、刀、錢、鑑鐘、美身具、墓磚等、その他耶穌教徒墓碑、石棺など、史學研究上重要な參考品の見學を爲し、得る所頗る多かつた。次に國史研究室に於ては三浦周行博士の指導によつて同研究室、陳列室及び文學部書庫等を見學し、是亦大いに益する所があつた、やがて研究室を去つて、圖書館に行き、新村館長の好意

により、山鹿司書官の案内にて、書庫、閱覽室等の參觀及び貴重書數種の閱覽をもなすことが出來た。時に午後零時半暫時構内の綠陰に休息の後、大學を辭し、それより一時、自由行動をこころこゝした。或は宇治、黄檗山方面に、或は市内の見物に、或は加茂の河畔に夜來の疲れを慰するもあつたが、やがて豫定の如く京都驛に集合し、同驛を發して山陰道へと向つた。一行は占部百太郎、幸田成友、伊木壽一の三教授を始め卒業生加藤峻、福田四郎、恒松安夫、今宮新、伊丹榮七郎、山口昌、學生小室一夫、土居保太郎、有賀春雄、並に本誌編輯部員國分剛二の十三名であつたが福知山驛より卒業生宮島貞亮を加えて十四名となつた。

七月二十四日 晴天。寢苦しき寢臺の一夜は明けて、六時二分ヤスキ安來に着く、中海に臨んだ旅亭山常樓別荘に入る。「安來千軒名の出たところ、社日櫻に十神山」その美しい十神山も龜山と共に直ぐ目の前に見えて、極めて景色の好い所である。此の中海に「ソリコ舟」といふ一種獨特の形をした舟がある、旅亭より四五町の處に一二艘あるを聞いて、有志の人々は見物に出かけた。舟は、名の如く舳が非常に反つて居て、舳はさながら丸木舟の如く、極めて奇怪な形をしてゐる。寧ろ日本のゴンドラといふが適當かも知れぬ。漕者は一人であるが、速力は普通の和船の倍以上である。往時は可なり澤山あつたが、今はモーター船のために、速力

並びに建造費等の點に於て壓倒せられ、その數は次第に減じてゆくと云ふことである。

やがて一行十四名、三臺の自働車に分乗して、安來より東南約一里半の田舎路を疾驅して、宇賀莊村清井なる雲樹寺に着いた。當寺は、瑞塔山天長雲樹興聖禪寺と稱し元享二年牧新左衛門入道善興の本願により三光國師孤峯覺明の開創したものである。國師は嘗て入宋し歸朝の後、大いに南北兩朝の眷顧を辱うした名僧であつたので、その道風を慕うて僧俗次第に來集し、やがて七堂伽藍も備はりて、二十餘の塔頭を有するに至つたといふことである。然るに時勢の變遷につれて興廢あり、殊に文政三年の火災によりて堂宇の大部分を烏有に歸せしめ昔時の面影を殆ど失ふに至つた。併し今猶ほ建築に寶物に幾多の貴重なる史料を傳へて居る。建築の多くは文政災後のものであるが唯だ大門(四脚門、屋根切妻造、本瓦葺)は元享創建當時のものに稱せられ、荒廢に近付きながらも、室町以前の様式を傳へて特別保護建造物に指定せられて居る、その他勅額高く掲げられたる山門(樓門)も亦形好く、幽雅の趣がある。

寺寶中國寶となれるものに三光國師畫像(絹本、著色)一幅と銅鐘一口とがある。畫像は偶々東京帝室博物館に出陳中と云ふことで遺憾ながら見るを得なかつた。銅鐘は立派に特色を備へた朝鮮鐘で、古色掬すべきものである。鐘面に「捨入雲州瑞塔山天長雲樹興聖禪寺、應安七歲甲寅十月一日、願主宗順」の文字が明瞭に窺はれる。

次に古文書は數多きうち、當時に於て最も神聖視して居るものは、御宸翰四通の一卷で、降雨の際、盛夏の頃は勿論、住職不在中も絶対に筐外不出の規定で曾て乃木大將も斷られたといふことであるが、吾等は特に拜觀の榮を得た次第である。後村上天皇繪旨、孤峯覺明法語を始め、南北朝時代の文書數通、足利義政、細川勝元及び京極、尼子、毛利、吉川、小早川等諸氏の文書も亦た一覽した。寶物、文書類の見學を終へ、大門まで見送られた住職醒醐師に別れを告げて、雲樹寺を出で、徒歩、十餘町を距てたる清水寺に向つた、中途より急坂にさしかゝり、鬱葱たる老樹の下、蟬時雨降る中を、汗にまみれて清水寺の仁王門に達し、更に本坊に着いた。時に午後一時半過ぎ。

當寺は天台宗に屬し、瑞光山と號す、古く推古朝の草創、大同元年再興と傳へ、鰐淵寺と共に雲州の二大古刹である。寺の境内は深山幽谷の中にあつて、その規模の雄大と景趣に富めることは正に當地方第一と云つてよい。當寺で晝食、人里離れた此の山中で都會にも稀らしき調味の善と、材料の贅を盡した精進料理の饗應を受けやうとは、吾々の夢想だにもしなかつたことである。

食後古文書類の見學をした、當寺は天正の兵燹によつて大半烏有に歸したので、寺寶も多く失はれたが、猶ほ足利時代に於ける鰐淵寺との座頭論争の書類を始め、江戸時代及び明治初年の文書等多少見るべきものがあつた。本坊を辭して堂塔の巡詣をした。根本堂は七間四面の柿葺、單層入母屋造りで、特別保護建造物となつて居る。その様式は大體室町時代の風であるが、柱等には大

同建立當寺のものかと思はるゝものがある。また堂内に安置されたる本尊十一面觀世音（木造立像）及び阿彌陀如來脇士三體（木造坐像）は共に國寶に指定せられてゐる。尙ほ堂内に灯されたる燈火は高野山の有名な貧者の一燈と同様に、大同以來滅せられたことがないとの傳へである。本堂の附近にある三重塔は文政再建のものであるが、之に登つて境内を大觀し、遠く眼を放つて日本の波濤を望んだ心持は何とも言へぬ爽快であつた。

時刻既に迫つたので急ぎ阿彌陀堂の本尊を拜し、大門を出で、迎の自動車に乗り、安來に歸る。四時半同驛發の列車で米子に戻り、驛から再び自動車を驅つて出雲富士の名ある大山の雄姿を眺めつゝ、車上より正平塚を見て、三十餘分にして皆生溫泉、旅館靜養館に着き一泊した。

七月二十五日 晴天。七時過ぎ自動車上の人々なる。一行期せずして二隊となり、一は米子驛に他は次の後藤に向つたが、やがて同一列車に乗り合ふことができ、八時十分境港着、直ちに、美保關行小蒸汽船に乗る。海上極めて靜穩、一時間許りにして美保關に着く、美保關尋常高等小學校長長谷川茂八郎氏等の出迎を受け、先づ國幣中社美保神社に參拜した。

本社は大國主神の御子事代主神並に三穗津媛を祀り、五穀、漁獵、航海、利殖の神として四時參拜者絶えず、今は三保教會といふもの出來て盛んである。當社は永録年間佐々木尼子の戦禍に罹つて烏有に歸し、一時非運に遭遇したが、吉川廣家征韓戦捷後の奉養として神殿の造營をなし、再び隆昌を來すに至つた。目下壯

麗なる社殿の改築中である。此の如く當社は、戦禍の爲めに傳來の文書、寶物等全部焼失し、現存するものが殆どないのは、實に残念なことであるが、この地の古墳、山麓等から發掘された彌生式土器、祝部土器、土偶、切子玉等は當社獨特の諸手船及び吉川廣家棟札と共に見ることができた。殊に諸手船は二艘あつて、春秋二回の神事の時の競漕に使用せられるといふことである。その實物四分の一の模型によるが、船長五尺四寸、船尾八寸七分、船首幅六寸、船深三寸七分、兩舷の權（八本）九寸二分、船尾の大權（一本）一尺八寸六分、舟の運行は權による。權は兩舷に相對して二對づゝ八本と船尾に大權一本を備へ都合九人で操るのであるが、船尾のものは特に方向を定める舵の用をなすものである。また船首には眞劍マツカと稱する銚の形をしたものを立て、船尾には神の神社の旗が立てられてゐる。

十時半頃、宮司横山清丸氏以下の好意を謝しつゝ、神社を辭して程近き佛谷寺に至り、大日堂に安置せられたる七軀の國寶佛像を拜見した、此等の佛像はも當所の古刹三明院にあつたが同寺の廢滅の後佛谷寺に傳はつたものと思はれる。何れも出雲地方特有の手法を示せるが、就中、脇立の一體は最も優秀である。

正午美保館に引上げ、食後、汽船の出帆時まで休息す。中には十町の道を遠しとせず諺で名高い關の五本松を見物に出掛けた人々もあつた。此處の山上は今公園となつて居て、景色も亦た格別である。斯くて都合上恒松、山口、土居の三名は先發して境港に至り、それより鐵路松江に向つたが残りの本隊は午後四時三十分

美保港を發し海路風光を賞しつ、中海を過ぎて、六時四十五分松江大橋下に着き、直に京店の旅館皆美館に入る。一方陸路を採つた別隊は松江驛にて、島根縣教育會幹事正井儀之丞、縣立松江中學校長田中一元、山陰新聞記者吉田行精等諸氏の出迎を受けて程なくまた皆美館に到着した。宿は宍道湖畔に在り、遙か湖上に嫁ケ島を望み、眺めよき靜かな家である。折しも天神祭の當日で、我等一行も思ひ／＼に見物に出掛けたが、市中の雑踏、さすが山陰一の大都會たるの感を深からしめた。

七月二十六日 快晴。午前九時半島根縣廳訪問。縣史編纂係野津左馬之助氏の厚意により同係に於て蒐集せられたる史料を見學したる後、十一時廳舍を辭し、舊藩主松平家の千鳥城趾を見物する、此の城は關ヶ原役後、當國の領主となつた堀尾吉晴が、慶長十二年より十六年に亘つて築いたところで、堀尾家斷絶後京極氏を経て、寛永十四年松平直政の有さなり、爾來同家の居城として維新に至つたものである。外郭は既に開拓せられて多くの廳舍等に充てられたるが、牙城は猶ほ嚴密して存し、五層の天守閣高く聳えて、正に松江市の一大美觀である。閣に昇れば市中は勿論、晝の如き、宍道湖畔の風景は一眸の中に收められ、老松の梢を吹き來る涼風は連日の苦熱を忘れしむるに十分であつた。正午旅舎に歸り、午後一時二十五分發の列車にて玉造に趣く。同三十九分湯町驛に着き、玉湯村々長福場彌市氏、同村々社々掌濱藤清氏等の出迎を受けた。驛には僅かに二臺の人力車あるのみ、その中一臺は二人乗りなりしため、三教授は之を利用し、他は十八町餘の

道を徒歩で玉造温泉に向ひ、先づ村社玉作湯神社に參拜した。本社は玉造川の東岸、小高き林丘上にある櫛玉神、大名持神、少毘古名神を祭神とし、規模は小さいが、由緒深き式内の古社である。社寶として多數の古代玉類、古代玉磨砥石、古鏡、陣太鼓胴等がある、玉類は勾玉、管玉、平玉、切子玉、小粒玉等、種々あるがその多くが加工の際の瑕物や未製品であるのも面白く、殊に硝子玉は最も珍らしく注意すべきものである。六十餘個の砥石に至つては最も珍品で多くは長さ三四寸より尺餘のものであるが最も大なるは縦三尺横一尺餘もあつて一人では動かすこともむつかしい、又陣太鼓の胴は毀れて七片となつてゐるが、こうあん三年、元享元年、天文十一年等の銘文があり、弘安三年佐々木伊豫守の寄附といふことである。社掌遠藤貴美氏の談によれば、社藏の勾玉類の多くは、當社の邊や、玉ノ宮、平床などいふ玉造川の兩岸附近から發見されたものである。今も程近い花仙山及び馬背等から玉の材料たる出雲石瑤瑤は産出するのであるが、濫掘を禁じられてゐる。

玉造には古代の遺跡としてまた古墳もある。一行は神社を辭して後、對岸築山の竹林中に船形石棺を探つた。石棺は長さ五尺四寸七分(内徑)前方幅一尺、中部幅一尺二寸、後部幅一尺四寸深さ七寸で、一枚石をくり抜きたるものである。此の石棺は既に安政年間に發掘されたもので、玉作湯神社所藏の硝子玉もこの中から出たといふことであるが、露出のまゝ、風雨に曝されて残つて居る。因に古代には此の附近までも海が入り込んでゐたといふ話である。

見學終りて溫泉旅館保性館に於て入湯、溫泉はラヂウムを含める鹽類泉で、温度高く、透明で心持のよい湯である。少憩の後四時三分湯町驛發の列車で松江に歸つた。

此の夜縣教育會主催、松陽、山陰兩新聞社後援の下に市役所樓上に於て慶應義塾講演會が開催されることになつてゐたので、占部、伊木兩教授は之に臨み、代議制度や地方的勢力に就いて熱辨を振つて歸られた。湖上を往き來する屋形船の灯は今宵も昨夜と異らず、絃歌の音は遠く近く波上を傳はり來つて、水の都の夏の夜は何時しか更けた。

七月二十七日 晴天。午前八時三十二分松江を發し、出雲今市驛にて輕便鐵道に乗り換へ、十一時近く雲州平田着、これより二里半を距つる鰐淵村別所なる鰐淵寺へ向ふのである。兼ねて用意の自働車二臺に分乗したが、一人餘るので土居氏は犠牲となつて、得意の自轉車で後を追ふことにした。併し難路のために途中より之を棄て共に自働車に縮詰の苦行を味ひつゝ、漸く鰐淵寺の麓に着く。車をすて、數町の坂路をたどり、程なく寺坊に至り着いた。緣起によれば、當時は推古天皇の朝、智春上人開創の靈場で延暦年間天台宗となつたといふことである。往時隆盛の時代には鰐山十二坊と稱し宏大なるものであつたが、今は根本堂、釋迦堂、常行堂、摩陀堂、鐘樓、山王社及び是心院、等院、松本坊等の數坊を残すのみである。

境内推古館(寶物館)に於て、特に陳列せられたる國寶以下の什寶觀世音菩薩立像(銅造)二軀、山王本地佛像(絹本着色)一

幅、一字金輪曼荼羅圖(絹本着色)一幅、後醍醐天皇宸筆御願文名和長年春書、僧頼源文書送進目錄、毛利元就畫像(絹本着色)一幅、以上八點は國寶であるが中にも後醍醐天皇の御願文は元弘二年八月十九日隱岐國御在留中のもので、雄渾なる御筆蹟にも不屈不倒の御精神を拜察することができ。また頼源の文書送進狀は彼が南朝に盡した勤王僧であるがためのみならず、そのうちに右の御願文を「於隱岐國々分寺御所被下之」と記せるより、天皇の隱岐に於ける行在所が鳥後の國分寺なりてふ説の根據として知られて居る。また毛利元就の畫像の存するは、元就と當寺和多坊榮藝との關係に因るものである。尙ほ此等國寶の外にも大永三年松永久秀の日御時へ奉納した法華經、仁平元年の銘ある土製の經壺、其他經文、佛畫等見るべきものが少くない。また鐘樓には壽永二年五月の銘ある大鐘が懸かつてゐる。

さて本坊に於て晝食の後、前途の都合上、占部教授以下六名は出發して大社に向つたが、自餘の八名は居残り、古文書類に就いて伊木教授の説明を聴く。當寺の古文書は前述の國寶文書以外に鎌倉時代より明治年間に至る各時代のもの多く現存し、その數量内容共に實に雲州地方に於て最も出色のものである。例へば叡山關係文書、杵築大社關係文書、後醍醐天皇以下南朝繪旨等、足利氏關係文書、我國時代諸帝繪旨、女房奉書等、尼子、大内、毛利諸氏關係文書、寺領關係文書、清水寺相論關係文書、等一々枚舉に遑あらずである。

古文書の見學を終つた一行は更に案内せられて鰐淵の名の由て

起れる浮浪瀧を探險して寺を辭し、五時三十分再び自動車上の客となりて平田に歸つたが間もなく六時四十分同驛を發し、今市乗換八時廿三分大社に安着した。驛では千家男爵、千家管長の兩代理、杵築町有志大村貞藏、中島發太郎等諸氏の出迎を受け、直ちに人車を列れて、日本隨一の大鳥居を過ぎ、旅宿因幡屋に入りて先着の一行を合した。そして即夜大社教本院に於て講演會が催され、占部、伊木兩教授及び恒松、宮島兩氏出演、頗る盛會であつた。

七月二十八日 晴天。午前十時大村氏及び後藤藏四郎氏等の誘導で官幣大社出雲大社に參詣し、千家剛磨氏及び廣瀬禰宜等の案内を以て本社以下の巡拜を遂げた。當社は古來、天日隅宮、杵築大社、出雲大神宮など稱せられ、祭神は申すまでもなく大國主神である、その宮制は正殿式と云ひ齊明天皇の御宇に定められたるものと傳へらる、が、本殿の高さ八丈、方六間あり、實に日本最大の神社建築たるのみならず、本邦最大の神社形式たる大社造りの本家本元である。今の本殿は明治七年の改築で拜殿は永録十六年尼子經久の建立といふことである。また八足門の彫刻は拜殿内の彫刻と共に名工坪井大隅の作として名高く、會所には荒川重之助作の八千矛神の塑像及び稻田姫の木像が安置してある。その他境内には社務所(もこ國造の齋宿所たりし廳の舎)樓門、文庫、寶庫、鑽火殿(神饌調進所)厩舎等の諸建築及び毛利網廣寄進の銅鳥居などある。また大小數々の境内攝末社中では本宮の左右にある十九社は天神地祇の遙拜所であるが、俗には毎年十月日本全

國の神々が宿り給ふ所と云つて居り、本宮の背後、八雲山の麓なる妻鷲社は一時本宮の祭神とまで稱せられた素盞鳴尊を祀つたものである。

本殿以下參拜の後寶物館に於て神寶并に古文書類を拜觀した。その幾分を擧ぐれば、後醍醐天皇寶劍勅望繪旨、外同天皇繪旨數通、後西院靈元兩天皇宸筆、和歌、孝明天皇外夷攝服御祈繪旨、寶治二年遷宮注進記録、燧白燧杵(我國上古の發火器)二種、上古の琴板、同揆、國寶螺鈿秋野蒔繪櫛笥(安元元年高倉天皇御寄附)環珎曲玉、筑紫鉾、平安朝時代の八葉鏡、願開船(天明年間土佐本山助藤奉納)、國寶絲卷太刀(銘光忠、傳豐臣秀吉佩刀)刀劍十數種(集古十集所載のものもあり)三澤爲幸所用大弓(集古十種所載)、本殿模型等である。

斯くて當社司男爵千家尊統氏の招待により同家即ち國造館の書院に於て男爵始め大社教管長千家尊有氏并に一族諸氏と午餐を共にしたる後、目前にある潔齊殿の事を承り、また大社古繪圖(傳金岡筆)同慶長繪圖同寛文繪圖及び本居宣長古事記傳著述の時所用の筆二本(眞書は軸に藤野雲平製のレツテルあり宜長より千家清主に贈れるもの)を見せてもらつた。

午後一時半一行は厚く好意を謝して千家邸を出で、西十町の所にある稻佐濱に出て見た。此處は神代史に名高い國讓りの否諾の談判地として知られてゐるが、今は寧ろ海水浴場として繁昌してゐる。前は漫々たる日本海で右には近く御崎山の翠影を眺め、左には園の長濱遠く續いて遙に三瓶の秀嶺を望むところ、確に山陰

の一勝景たるを失はない。(三時二十分歸宿)

四時二十五分大社發の列車で石州に向ふ、千家剛磨氏同家々扶高橋喜一郎氏及び大村貞藏氏等は驛頭まで見送られた。杵築の滞在は短いながらも實に愉快であつたが、唯だ残念なるは時日に餘裕なかりし爲め、日御崎神社に參詣し得なかつたことである。今市にて乗換。六時七分石見大田驛に下車。驛には恒松氏嚴父嘉吉氏、安濃郡長田中爲一氏、恒松於菟二氏、臺灣小梅公學校長宇谷和一郎氏等多數の出迎あり。一同人車を列れて長久村なる恒松氏宅に至る。此の夜は旅館の騒々しさを離れ、我が家に歸つた様な心持になつて、一行は安らげく寢についた。

**七月二十九日** 晴天。午前九時大田町なる縣立中學校講堂に於て講演會開催。占部、伊木兩教授及び恒松、宮島兩氏の講演があり一同出席傍聽した。終て後、別席にて當町有志諸氏主催の茶話會に臨み、正午恒松氏宅に歸つた。この夜は恒松於菟二氏の招待により、一同六時半の列車で波根に至る。この處立神タテガミの奇勝を控えて海水浴にも適す。風涼しき臨海の料亭に日本海の彼方に沈む日輪の餘光を受けながら主客ともに打ちくつるぎ、鮮魚の調味に舌鼓を打つたが、更に夜に入り周圍一里餘の波根湖上に三隻の屋形船を艤して浮び、潯陽ならぬ出雲情緒に興をやる。興酣なる頃鯤の子の二三寸なるが灯を目かけて舟中に飛び入るこゝ數限りなく、實に痛快我を忘れて、銀鱗かゞやく小魚を手捕りにするなど、興趣彌々加はりて時の移るを知らなかつたが、やがて深更自動車に分乘して、恒松氏宅に歸る。

**七月三十日** 晴天。今次の旅行の豫定は昨日を以て残りなく果されたれば、己が自々解散することゝなつた。昨夜の夢未だ醒めやらぬ中にいちばやく郷里山口縣に向けて歸省の途につかれたる伊木教授を始め、正午頃には加藤、福田、宮島、國分、小室、有賀等の諸氏、夫々その目的地に向けて出發し、殘る七人も厚く恒松氏一家の厚遇を謝しつゝ、午後六時半の列車に投じて歸京の途についた。

顧るに東京を發して約旬日の旅行中、些の滞りもなく、豫想以上に見聞を廣め得たることは始終多大の盡力を致されし、恒松嘉吉氏一家を始め、各地に於ける諸賢の好意に因ることは勿論ながら、前後を通じて一日も雨天のなかつたことゝ、到る處自動車てふ文明の利器が備はつて居たことなども亦た與つて力あつたことである。

終りに臨み、右多大の便宜と厚情とを與へられたる諸氏に對し、茲に厚く感謝の意を表する次第である。